史談会研修旅行

久留米地方の古代文化を学ぶ

塩月佐一
（会員・佐伯市匠南）

十月二四日　佐伯―山鹿灯籠殿―チブサン古墳―八女市岩戸山古墳―久留米市水天宮―久留米泊

十月二五日　宿―梅林寺―石橋美術館―高良大社・神籠石―珍敷塚古墳―原鶴温泉泊

十月二六日　宿―朝倉町三連水車―秋月―小石原焼―佐伯

詳しく報告したいが紙数がないので、不十分な記述になるが古代史に関して報告したい。

山鹿灯籠踊りはあまりにも有名である。灯籠殿に陳列された御殿灯籠のみごとさは筆舌につくし難い。写真もカラーでないとその趣きを伝えることができないので省略する。まさに紙の芸術の妙技である。

岩戸山古墳

わが国の古墳は、現在確認されたものだけで約十五万基に及ぶという。だが現在のところ被葬者が確認できる古墳は、この岩戸山古墳（五二〇頃築造）が唯一であるという。

被葬者筑紫君磐井の事は『日本書紀』『古事記』『筑紫国風土記』（逸文）などの古文献に記されているが、被葬者が確定されたのは、漸く一九五六年（昭和三六）森貞次郎氏（九州産業大学）の研究によってである。

外堤を含めて東西の主軸一七六㍍、後円部幅一一〇㍍前方部幅一三〇㍍、高さ十八㍍、外堤の東北部には一辺五〇㍍の方形台地の別区が属している。

記録によれば墳丘には約二五〇〇の円筒埴輪が、更にその内側には多数の石人石馬が並べられていたといわれる。一年有半にわたる激戦の末に磐井は破れた。（継体天皇二十二年、六世紀はじめ）苦戦に怒り狂った官軍はこの埴輪・石人石馬をことごとく破壊したという。この遺物は現在狭い粗末な収蔵庫に乱雑に保管されている。惜しいことだ。

岩　戸　山　古　墳

この巨大古墳が宮内庁管理でないために、解放されて自由に散策できることはまことに有難い。写真の石人石馬は模造品である。

装飾古墳

装飾古墳として知られるものは九州に七二ケ所あり、筑後から肥後にわたる地域が中心で、総数の八割を占めている。この度見学したチブサン古墳（熊本県山鹿市）珍敷塚古墳（福岡県吉井町）は、竹原古墳（福岡県若宮町）等とともに我が国の代表的装飾古墳である。

チブサン古墳は全長四五㍍の前方後円墳で（古墳時代後期、六世紀半ごろ）複室の横穴式石室があり、後室の奥壁に赤・白・黄の三色で円文・三角文人物像が描かれている。保存設備が完備され、のぞき窓のガラスがくもって見えにくい。

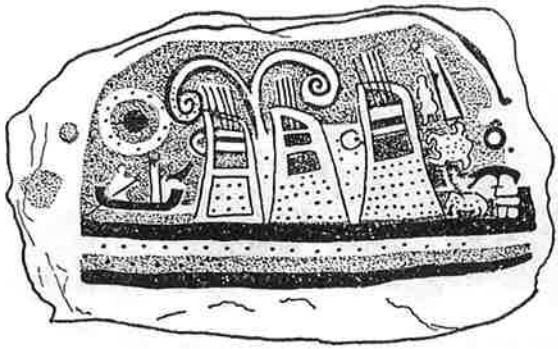
珍敷塚古墳の説明板には次のように書かれている（別掲の文様も説明板にある）

水縄山麓は東西に長く連なる古墳の大集団地帯である。その中で珍敷塚は東部に於ける古墳群の中で最も重要な装飾古墳の一つである。珍敷塚という地名から古墳の存在は知られていたが、墳丘の消滅と共に忘れ去られていた。ところが昭和二十五年の採土によって以前破壊された奥室の一部が原形のまま発見

された。

この古墳はもと長さ四㍍の横穴式石室の円墳で、残された花崗岩の奥室には、赤や青等の鉱物性顔料等で巧妙な構成のもとに、豪壮雄大な絵画が描かれている。

中央の大船には矢をさした三個の大きな鞆をのせ、その上に一個の蕨手文があり、左手にゴンドラ型の船、こいでいる人物、道案内と思われる軸先の鳥、輝く太陽をあらわす同心円、右手には盾を持つ人とその下に月を表わす同心円、その左に上から見たヒキガエルと前から見たヒキガエルが描かれている。



珍敷塚古墳の文様

六世紀後半頃の後期古墳と大陸文化に関連ある活動的絵画と考えられ、我が国の装飾古墳の白眉であり、最も重要な古墳である。

高良大社と神籠石

高良大社は、延喜式神名帳には「高良玉垂命神社」とあり、水縄山脈の最南端高良山（三一二㍍）の中腹に鎮座している。鎌倉時代まで御造営はすべて勅裁によって行われ、筑後国一の宮であるばかりでなく、九州総社・鎮西十一ケ国の宗廟と称された由緒ある神社である。朱塗りの美しい社殿は、久留米藩主第三代有馬頼利により万治二年（一六五九）から三年の歳月を費して造営された権現造様式で国指定重要文化財である。国宝「紙本墨書平家物語」をはじめ社宝が多い。

史跡高良山神籠石

高良大社を取囲むように、一㍍内外の長方形の切石の列石が一列に並べられ、谷をわたる部分には水門が設けられたと推定されている。現在確認されている延長は約一・六㎞で、一三〇〇余個の巨石が延々と連なるさまは

壮観である。北側は未確認であり、総延長は四㎞に及ぶと推定されている。明治三一年この神籠石が初めて学会に報告されて以来、この種の遺跡をすべて「神籠石」と呼ぶようになった。

しかし北九州を中心とするこの種の遺跡の中には、筒城・石城などの名を伝えるものもあり、また立地・規模構造が朝鮮式山城と類似しているために、霊域説と山城説が対立し、大正年間には活発な論争が行われたが解決の決め手はなかった。

昭和三八年新発見の佐賀県武雄市おつぼ山神籠石の発掘調査により、列石に柵や土塁を伴うことなどが判明し、また神籠石の分布が北部九州に集中していることなどから、大陸に対する防衛計画に基づく山城説が有力になっている。両者いずれにせよ今後の研究調査に待たねばならない。

水天宮と河童

安産・水難・火災よけの神として霊験あらたかとされている水天宮は筑後川岸にあり、全国に散在する水天宮の総本社である。安徳天皇とその母建礼門院（平徳子）外祖母二位尼・天御中主命を合祀する。神社は古くは「尼御前」と称された。

社伝によると、徳子に仕えた按察使局伊勢（のち千代と改む）が、平家没後鷺野原（現在地）に天皇らの霊を祭ったのがはじめという。その後諸所を転々としたが慶安三年（一六五〇）に久留米藩主有馬忠頼が社地・社殿を寄進してもとに復した。

水天宮の成立はつまびらかでないが、水天という社名と、筑後川の守護神とされていることから推測すれば、インドの水神（水天）等を祭ったものであろうという。

筑後川には河童伝説が多い。平清盛が悪事の報いで神になれなかったので、河童となって筑後川をはじめ筑後の各地で荒らし回ったという。その河童が水天宮の神徳によって、除災招福の神使になったと伝えられ、河童が人馬を水中に引き込むという属性は、千客万来・商売繁昌に霊験があるとされ、商人の信仰が厚く、水天宮信仰は河童信仰とさえ言われている。

東京の三大縁日の一つにあげられている日本橋蛎殻町にある水天宮は、文政元年久留米藩主有馬徳頼が江戸藩邸に建てた分社を、明治五年に有馬屋敷と共に現在地に移したものである。